

結婚している女性が働くかどうかということを決める時、さまざまな要因が影響している。これまでに培ってきた経歴や技能はこの程度か、働いた場合どのくらいの収入を得ることができるか、夫がどのくらい稼いでいるか、親からの経済的な援助はあるか、小さな子どもがいるかどうか、親から家事や育児の支援が得られるか、さまざまなことを考慮して決定している。これらは客観的に捉えられる要因であるが、女性

## 社会進出に対する女性の意識と就業

分業に対する考え方である。性別役割分業とは男性は外で働き女性は家事・育児をするという性別に基づく家庭内の分業体制である。この考え方に対する賛同の度合いを調べることで女性の社会進出に対して保守的かどうかを測ることが出来る。

女性の社会進出に対する意識にはこれ以外にもさまざまなものがある。The World Value SurveyやThe International Social Survey Programmeは社会における意識に対する態度を国際比較できるように調査している。これらの調査の中では、例えば、「Being a housewife is just as fulfilli

ずといっているほど問題が起る」といった質問が女性の社会進出に対する意識を調査するために設けられている。

Sakamoto and Morita

(2006)では、「妻は夫よりも多く稼ぐべきではない」という意識が日本の既婚女性の就業と家事時間とのような影響を与えているかを分析している。

彼らの分析結果から、夫よりも高い収入を得る可能性の高い妻は、就労を控える傾向があること、夫婦の収入のうち妻が稼ぐ割合は、妻の収入が夫の収入を上回る50%のところまで急激に減少しており、妻が夫よりも稼がないようにしていることが明らかにされている。

## 影響与える

### 「夫より稼ぐべきではない」

が社会に出るのに対して意識といった要因も重要である。

代表的な意識は性別役割



名古屋市立大学大学院  
経済学研究科教授  
山本(森田) 陽子

ng as working for pay.

(主婦であることは給料をもらって働いているのと同じくらい充実している)」

「A preschool child is likely to suffer if his or her mother work. (母親が働いていると、就学前の子供が苦しむ可能性が高い)」

社会で求められる女性の役割から逸脱しないよう行動する結果だと考えられる。女性の活躍を推進するためには、社会全体の意識改革も重要となる。

参考文献 Sakamoto,

K., Morita, Y. Gender identity and market and non-market work of married women: evidence from J

apan. Rev Econ Household (2023). <https://doi.org/10.1007/s11150-023-09661-x>

やまもと(もりた)・よこい  
労働経済学・社会保障論。一橋大  
学大学院経済学研究科博士(経済  
学)。1969年生まれ。